

## 大津絵

大津絵は、江戸時代（1603～1867年）に大津で発展した郷土民画の一つです。当時、大津は江戸と京都を結ぶ東海道上で、京都の一つ手前の宿場でした。街は旅人や商人の拠点となり、地元の絵師は通りすがりの人に描いた絵をお土産として販売するようになりました。

元々は宗教をテーマにした絵で、持ち運びに便利のようにざら紙に直接描かれていました。絵は匿名で制作され、礼拝の対象として家庭に飾られるようにデザインされていました。色使いは7色と基本的なもので、黒、白、黄土色に加え、地元の寺院の装飾に用いられた朱色の絵の具だけで描かれるのが一般的でした。

時間の経過とともに、大津絵のテーマは拡大し、人気のある民話の登場人物やオリジナルの創作物を含むようになりました。優しい僧侶に扮した鬼や、福の神が他人の頭を剃る姿を描いたものなど、より不敬で風刺的なトーンになっていきました。また、絵の横には、日常の愚かさを揶揄するような教訓が書かれていることも少なくありません。大津絵の人気が高まるにつれ、絵柄もカラフルになり、生産を速めるために江戸の浮世絵のような木版画の技法が採用されるようになりました。しかし、この技法は輪郭だけに使われ、それ以外の部分は手描きで描かれていました。

明治時代（1868～1912年）になると東海道の利用が減り、大津絵の人気は衰退していきます。しかし、その後も大津絵は何世代にもわたって受け継がれ、現在も市内には唯一の大津絵師が残っています。高橋松山は、大津の中心街で1868年から続く大津絵工房を営む5代目の絵師です。高橋家の工房は世界で唯一残っている大津絵の工房で、明治時代の作品を所蔵しています。松山は現在も新しい作品を制作しており、大津絵の歴史と未来を一度に感じることができます。